

国際共同研究事業  
スイスとの国際共同研究プログラム  
平成 28 年度実施計画書

平成 28 年 12 月 26 日

共同研究代表者

所属機関・部局 国際基督教大学・教養学部

職・氏名 准教授・李 勝勲

1. 研究課題名 (和文) 音声音韻及び 로마字と元文字の新正書法: ヒマラヤの原住民話者への助力

(英文) Phonetics Phonology and New Orthographies: Helping Native Language  
Communities in the Himalayas (PhoPhoNo)

2. 共同研究実施期間

平成 29 年 2 月 1 日 ~ 平成 32 年 1 月 31 日 (3 年 0 ヶ月)

(注) 本計画書は、受託機関を通して電子データにて提出してください。

## 5. 本年度実施計画の概要

※ 申請書の内容を踏まえて、日本語にて記入してください。

※ 経費との関連がわかるように具体的に記入してください。

本プログラムはスイスのベルン大学と日本の国際基督教大学との共同研究プロジェクトである。その研究課題は「音声・音韻学、ラテン文字・現地文字を用いた新正書法：ヒマラヤ山脈の現地語コミュニティへの援助」(Phonetics, Phonology and New Orthographies in Roman and Indigenous Script: Helping Native Language Communities in the Himalayas (PhoPhoNO)) である。具体的には、ヒマラヤ山脈のチベット・ヒマラヤ語群に属する三つの現地語(デンジョンケー語と二つのタマン語の方言)の音韻研究と正書法の開発を目標としている。本プロジェクト(PhoPhoNO)では、複数の分野の専門家の知識と技術を駆使し、新しい視点からこれらの言語の構造を正確に記述し後世のために記録することによって、より奥深い研究が期待できる。スイスと日本の言語学者が協力し、ヒマラヤ山脈の原住民の言語コミュニティが母語を使い続けられるよう援助するものである。

以下に2017年2月から3月の研究活動計画の詳細を記す。短期間ではあるが、第1段階(2017年2月から2018年3月まで)の最初の部分であり、この段階での成果は2017年度の研究活動の内容を決める重要な役割を果たすものである。まず、タマン語とデンジョンケー語で使われる音声の音響と空気力学的研究を進める。二人の博士課程修了者(Dr. Hwang と Mr. Bajracharya)がタマン語とデンジョンケー語に関する音声学・音韻論の様々な文献を精査し、この二つの言語の音韻体型の記述をまとめる。タマン語とデンジョンケー語はヒマラヤ山脈で話されるチベット・ヒマラヤ語群の言語であるから、近隣で話されている言語についても研究文献を収集する。進捗状況の確認のために、研究代表者(Seunghun Lee)はこの二人と毎週研究会を開く。また、三年間の助成金の詳細とワークショップの開催などについて、全ての共同研究者とコンサルタントに周知させることもこの段階で行う。

次に、日本の研究チームのための設備備品と消耗品の購入について記述する。まず設備備品についてであるが、二台のDR100-MKII (Tascam) デジタルレコーダーと三台のMacBook Airを購入する。複数の研究者が共同プロジェクトを行う場合、同種の研究機材を使うことは必須である。収集された資料を正確に分析するには同種のプログラムを同種のコンピューターで使う環境が確保されなければならない。したがって、MacBook Airを音響と空気力学的研究を進めるメンバー三人のために購入することには十分な理由があると考えられる。消耗品に関しては、シュア社(Shure)のXLRマイクロフォン二機とゼーンハウザー社(Sennhauser)のヘッドフォン二機を購入する。最初に機材を整えることによって、研究メンバーが早期に機材に慣れ使いこなすようになることを促す。

また、2016年度の最後になるが、2017年3月27日から4月3日まで研究代表者はベルン大学に渡航し、スイス研究チームと直接対面して準備のための会議を何度か開く。この会議では、日本チームとスイスチームの詳細な研究計画について話し合う。また、両チームのタマン語とデンジョンケー語が話されている地域への研究訪問計画の詳細についても話し合い確認をとる。日本とスイスの学年暦が異なるため、両チームがネパールにおいて会合し共同研究をするのは夏期になるが、三年間全体の両チームの会合日程、共同研究日程などについても話し合い、本研究経費を最大限効果的に活用できるようにする。

最後にまとめとして、二人の博士課程修了者との研究会、設備備品と消耗品の購入、ベルン大学への訪問は、2017年度の研究活動を進める上で重要な基盤となるものである。これには、機材と研究活動環境の整備、ネパールでの両チーム合同のフィールドワーク、スイスチームの日本への研究訪問(9月予定)などが含まれる。

6. 本年度経費総額\* 1,535 千円

\* 研究経費（直接経費）と間接経費の合計を記入して下さい。

（単位：千円）

研究経費（直接経費）							間接経費
設備備品費	消耗品費	旅費等		人件費・謝金等	その他経費	外国旅費・人件費・謝金等に係る消費税*	
		国内旅費	外国旅費				
469	110	0	186	416	0	大学負担	354

\* 外国旅費・人件費・謝金等に係る消費税を本経費から支出しない場合は、その理由等を「外国旅費・人件費・謝金等に係る消費税」欄に記入してください。

\* 委託費の上限は申請額に基づき、研究経費（直接経費）1,000万円以内/年（かつ3,000万円/全研究期間）に対し、30%の間接経費を加えた額とします（ただし平成28年度のみ）。

翌年度所要見込額	翌々年度所要見込額	3年度後所要見込額
11,000	11,000	9,700

左の欄は該当する場合のみ記入してください。  
（単位：千円）

\* 上の欄は該当する場合のみ記入してください。（単位：千円）

\* 委託費の上限は申請額に基づき、研究経費（直接経費）1,000万円以内/年（かつ3,000万円/全研究期間）に研究経費に対し10%以内の事務委託手数料を加えた額

研究計画全体必要額
33,235

2年度目以降の場合は、前年度までの執行済額も含めて記載してください。  
（単位：千円）

\* 研究計画全体必要額の上限は申請書記載の額とします。

7. 設備備品費、消耗品費、人件費・謝金等、その他経費

	細目	金額 (単位：千円)	積算内訳
設備備品費	録音機	130	DR100-MKII (Tascam) 2 個
	パソコン	339	MacBook Air (Mac) 3 個
	計	469	
消耗品費	マイク	70	WH30-XLR (Shure) 2 個
	ヘッドフォン	40	HD280 (Sennheiser) 2 個
	計	110	
人件費・謝金等	ポスドクおよび博士 後期課程学生	416	Dr. Hwang & Mr. Bajracharya (1,300 円×160 時間 (2 ヶ月間) ×2 人)
	計	416	
その他経費			
	計		

備考：

- ① 細目は設備備品費、消耗品費、人件費・謝金等、その他経費（「通信費（切手・電話等）」「運搬費」「印刷費」等（手引 8-8 参照）の別に記入してください。
- ② 設備備品費、消耗品費、人件費・謝金等、については、「積算内訳」の欄に品名または人物名、単価および数量を明記してください。

8. 交流計画

(a) 日本側参加者（代表者を含む）の国内出張計画

出張者 (氏名)	出発地 (都市名)	用務先 (都市名)	旅行期間*	用 務 (用務先・用務内容)	経費負担**
なし					

\* 旅行期間の欄の記入例：「6月頃、10日間」

\*\* 本経費使用予定の有無を記入すること

(b) 日本側参加者（代表者を含む）のスイスへの渡航計画

出張者 (氏名)	出発地	用務先 (都市名)	旅行期間*	用 務 (用務先・用務内容)	経費負担**
Seunghun Lee 李 勝勲	国際基督教大学 (東京)	スイス (ベルン)	3月～4月 (8日間)	今後3年間の研究プロジェクト実行計画を確定 (2017/3/27-2017/4/3)	有

\* 旅行期間の欄の記入例：「6月頃、10日間」

\*\* 本経費使用予定の有無を記入すること

(c) 日本側参加者（代表者を含む）のスイス以外の国への渡航計画\*

出張者 (氏名)	出発地	用務先 (国名・都 市名)	旅行期間**	用 務 (用務先・用務内容)	経費負担***
なし					

\* 外国出張の渡航先は原則としてスイスのみとします。ただし、当該共同研究の研究成果発表を目的とする学会等への出席や、フィールドワーク等で当該第三国へ行くことが必須である研究上の理由がある場合に限り、スイス以外の国を訪問することが可能です。

\*\* 旅行期間の欄の記入例：「6月頃、10日間」

\*\*\* 本経費使用予定の有無を記入すること

(d) スイス側研究者の来日計画

出張者 (氏名)	用務先	旅行期間*	用 務 (用務先・用務内容)
なし			

\* 旅行期間の欄の記入例：「6月頃、10日間」